
転生する魂たち

konakusa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生する魂たち

【Nコード】

N3147W

【作者名】

konakusa

【あらすじ】

転生と再会と運命で？の書き直しです。

ある日、突然通り魔によって殺されてしまったカンナ

静寂の川で、出会った世界の管理人、神様の様な人の手によって別世界で新たな生命として生きていくことになった。

カンナは、自分しか使えない能力や力を隠しながらも、親友のマリアと共に過ごしていく。

運命に翻弄される、主人公の物語です。

0 話 始まりのハジメ（前書き）

新たに書き直して、わかりやすく進めていききたいと思います。

0話 始まりのハジメ

夏になり、ニュースでも異例の猛暑が続いているとアナウンサーが言っている

朝の6時30になると、気温が29度を越えて二度寝する気になれなかった。

熱い熱いと言いながら、寝ていた時の汗を流すためシャワーを浴びに行った。

お風呂から、出てリビングに行くとき既に弟の啓一くけいいちくが既に起きてエプロン巻いて弁当の用意をしている。

テーブルには、目玉焼きが乗っかっているお皿と、コンセントに繋がってパンを焼いているトースターがあった

「啓ちゃん、私、今日帰ってくるの遅いからね」

朝、何事もない平和な日常

弟が作ってくれた目玉焼きを、今、焼けた食パンの上に乗せて食べる。

パンに目玉焼きを乗せて食べるのが私の食べ方だ

そして、そんな私を何故か微笑ましそうか顔をする啓ちゃん

弁当は既に完成し、ご丁寧に袋にしまってバックに入れてくれた。

「分かった、じゃあ夜は少し遅めにつくるよ」

「先に食べていてもいいよ？」

「姉さんと一緒に食べたいんだよ」

「・・・ふうん」

うれしい事を、いつてくれるじゃないか

私の両親、海外で働いている

収入はそれなりの額なので、二人で何とかやっていける

ほとんど啓ちゃんが出来てくれるんだけどね

私は何故か家事はダメみたいだし、もし啓ちゃんがいなかったら餓死してしまうだろうな

家を出る

地元の公立高校に通う私は、制服を着て歩いて20分はある学校の坂道を登っていく

日差しが、黒髪に熱を貯めていくので、熱くて仕様がな

休みの出かける日は、日傘を持っていくけど。

でも、学校にまで持っていいたらなんかアレだしね？

「おはよう」

「あ、おはよう」

熱い坂道を歩き、何とか学校に着いて下駄箱
そこで、良美に出会った。

「でさあ、昨日なんか私が作ろうとしたのに、啓ちゃんたらインスタントのカレーなんか買ってきたのよ、どう思う？」

「それは……仕方ないでしょ」

「ひ、ひどい」

「……それに、いいじゃない。毎日充実そうなカンナさん？」

「なんだか嫌味に聞こえますけど……」

「うん、嫌味だもん」

良美 よしみ、私の小学生からの同級生。

不思議な縁で、今までずっと学校・クラスが同じな腐れ縁となっている

私の愚痴を、まるで羨ましそうに見つめていく彼女の視線に気がつかないように続けて言った。

良美は、いや、良美の両親は今夫婦としての最後に入っているらしい

あまり学校で私に見せてくれないけど、この前苦しそうな顔をしている良美を。

体育館の薄暗い所で一人立って、涙をこらえている彼女を見たことがあった。

私はその時、何も知らず良美に話しかけてしまったが、彼女はなにが呆然とすると体育館から出て行ってしまった。

その後に聞いたのだ、良美の今の環境を………

「そういえば、今回の桜祭って、何するんだっけ？」

「……喫茶店よ、普通のね。だからそのキラキラ顔をやめなさい」

「ふ、普通の！？　なんで！？　そこは手堅くメイド喫茶とかコスプレ喫茶とかにしなよ」

良美は、スタイルいいから見てみたかったな

「……別にいいじゃない、それにメイド喫茶なんて、あの頭が固い

生徒会長と校長が許可しないわよ。」

「それは、一理あるわね」

あの生徒会長とか、萌なんかに興味なさそうだし

「でしょ？ それに、経費だってかかるから。今年、生徒会で出してくれるお金って3万円までらしいし」

「なにそれ、5万くらいだせよお」

3万って、結構なお金だとは思うけど、3万じゃ本格的なものなんてできないじゃんかよ

「内は、お金がある私立と違って公立だしね。学費免除はうれしかったけど、こういう行事にいろいろ制限があるし、考え物よね」

「うー」

「それに、アンタ、部活があるんでしょう？ ほら何だっけ……」

「未来？」

「そうそう、先生が面倒なテーマ出してきたんでしょ？ そっちに頭向けなさいよ。桜祭まで後、一週間なんだから」

「そうだね……………」

私は芸術部に入っている

あ、芸術部って名前がややこしいけど、美術部のことね。

絵は割と得意な方で、中学の時から続けているのだ。

今回の課題は、なんと未来と、微妙なものだった。

「我が芸術部は、伝統として一年生は未来、二年生は過去、三年生はフリーの絵を書くことになっている。期限は一ヶ月、いい絵を持ってくるように！！」だ、そうだ。せめてもっとかっこいい課題にしてほしかった。

それに伝統って、この芸術部って4年前に出来たって聞きましたけど……………

「ガンバ」
「へーい」

「よし、まあまあ感じね」

先ほどまで書いていた絵を見ながら言う
すでに時刻は7時になるうかとしていて、夏で太陽が沈むのが遅い
があたりは暗くなるうかとしていた。

絵を指定の位置に置いて、急ぐようにして学校をでた。

グラウンドでは、まだ野球部とサッカー部が練習をしているのが見える

「啓ちゃんには、一応遅くなるとは言っただけど心配するかな？」

早く帰って、啓ちゃんを安心させてあげよう

帰りは下りだから早く帰ることが出来る

夕暮れの、オレンジ色に染まる空を見ながら私は思う

（あんまり……痛くないんだな）

私は、何故か道路のアスファルトの上で、うつ伏せになるように横たわっていた

あたりはアスファルトの色ではなく、赤色に染まっていた

（そういえば、啓ちゃんが昨日、この辺でーって、言ってたじゃない、忘れないでよ私）

赤い色は、下り坂なアスファルトを下へ赤へと染めていく

所々から、騒ぐ音や悲鳴のような声が聞こえた

誰かが私に話しかけてくる

（すい……ません、目を開けても……見えない）
どう凝らしてみても、話しかけてくれる人の声に答えることが出来
なかった。

あ、今何時だろう

「啓ちゃんが、家で待ってる……」

1話 白い世界

あたり一面、白い世界だった。

どこまでも続いている白い地面、白い空

「ここは、どこなの？」

私は、………そうだ！ 啓ちゃんが待つてる。早く帰らなくちゃ
しかし、何処を見ても、この場所から出る場所はない

辺りを歩いてみると、白い地面に、大きな川があった。

いや………川ではなかった

流れているのは青白い何か……まるで、人魂見たいな炎が大量に流
れていた。

「これは………」

『それは、君の世界の生物の魂だよ』

突然、川を見ていた私の後ろから声が、透き通るような声が聞こ
える

それまで静寂だったこの場所に、私以外の声に驚いて飛び上がった
後ろを振り返ると……

「でも、なんで君は人型でここににいるのかな？ ここは魂しか形成

できない場所の筈なんだけど……」

この世界とマツチするすべてが白色な人がいる

白人の様にすべてか透き通るような白い肌、見たこともない銀の髪と瞳

笑みを浮かべながら言ってくる彼は、まるで天使の様な人だ。

「あなた誰？」

「僕？ この場所の管理人かな？」

「管理人？ ここは何処なの？」

「君、輪廻つて知ってる？」

「輪廻……魂の循環場所ですか？」

「そんな様なものだよ、ここは……」

再び青い人魂の様な物を見る

「あれって……まさか」

「魂。君が此処にいるって事は、君も死んだんだね」

「……………え？」

体中の血が沸騰する様に熱くなるのが分かった

「え、え？ 死んだ？私ですか？」

「ああ、ここは魂の循環場所。死人しかこれない場所なんだよ」

「じゃああなたは……」

「僕は、ここの管理人だ、人じゃない」

「そんな……」

だって、でもなんで私、死んだの？

「ちょっといいかな？」

男の人は、そういうとオデコに手を当てた
数秒その状態がつづくとき軽い口調で答えた

「君さ、どうやら刺されたらしいよ」

「さ、さされ……」

そういえば、お腹のあたりを刺されたような……

「急に刺されたから、ショックで記憶が飛んでるんだね。」

「で、でも私、誰かに恨まれたことないですよ。友達が多かったし」

「通り魔だ・そうだよ？ 弟さんが、家を出る時に言っていたんじゃないの」

啓ちゃんが……

『最近姉ちゃんの学校の近くで、包丁を持った男が彷徨いてるらしいよ？ 昨日学校から連絡網で回ってきたから、帰るときは誰かと帰ってきなよ』

『そうなの？』

『誰か、部活の人と帰ってこいよな。それが僕が迎えに行く？』

『大丈夫、それに中学生の啓ちゃんは、家事と言う大事な仕事があるでしょ』

『まあ、そういうなら……』

『そうだ、なんで私、忘れていたんだろ？』

それで、私帰りの下り坂で横から来たロングコートを着ていた男に
前から……

「あはっ！ 私バカだなあ」

ほんとバカだなあ、啓ちゃんを一人にしちゃうなんて

「君は……」

何か言っている声が聞こえたが、私にはまったく聞こえなかった。
静寂が、この空間に包まれる
漸く心の整理が終わった

「じゃあ、……私行きますね？」

「行く？ 何処に行くんだいカンナさん」

私の名前……そっか、さっきのは私の情報を読んだのか

「だって、私死んじやったんでしょ？ だったらあの川に行かなく
ちや」

「ああ」

「じゃあ、もう一度生まれ変わるために行かなくちゃね。ここに居
ても意味ないし」

「そうだな」

「うん、ありがとね」

最後にお礼を彼に言う、そして後ろを振り返り川へと飛び込もうと
すると、ある声が私の行動を止めた

「……お前の弟」

「え？」

「あと少しで此処に来るだろうな」

「！？」

ここに来る？ ここって死者が来る場所何でしょ？ 何でここに啓
ちゃんが来るの

「何いつてるの？」

「お前、弟がお前の居ない世界で生きていくと思ってるのか？」

「啓ちゃんは、しっかりしてるし大丈夫な筈よ」

私ならともかく

「弟は、……いや、お前は知らない方がいいだろうな。」

「いろいろ気になるけど、なんで啓ちゃんは此処に来るの？」

「自殺だよ」

「じ、じさ」

「お前が死んだ次の日、首吊り自殺を仕様としてるんだ」

「……………そんな」

「なんで、啓ちゃん……………」

「とまあ、そこで取引だ」

「え？ 取引？」

「お前の弟を助けてやろう」

「ほんと！？」

「すぐる思いで彼を見つめる」

「ああ、条件は君が別の俺が管理している世界に行くことだ」

「え？ 別の世界…ですか」

「そう」

「でもなんで」

「別に私が言っただって、彼には何の利益はないはず」

「今は言えないな、その内話す。で？ どうする？」

「…………… 啓ちゃん、助かるんですよね？」

「ああ」

「分かりました、行きます。あなたの世界に」

「啓ちゃんが助かるなら何処にだって行くわよ！！」

「別に俺の世界ではないけどな。ただ管理してるだけだから」

「俺って、そっちが素ですか？」

「まあな、……………じゃあ行くか」

彼の一声で、私の下にどこかのアニメで見たことあるような魔方陣が書かれた。

「なにか、言うことでもあるかい？」

「いえ、ただ……ありがとうございました」

「ん？」

「あなたには何が利益あるかわかりませんが、私は助かったっていうか救われたというか」

「………ありがとう、ね。その言葉は貰っておくよ」

「はい」

自分でもわかった、私自身が別に引つ張られる感触
不安はある、知らない世界に行くのだから不安でいっぱいだ。

「そうだ、君には能力でもつけてやろう」

「能力？」

「ああ、そうだな……瞬間能力 テレポート。君はこれから生まれてくる所から始めるから、膨大な力は体によくない。これが一番いい能力だろう」

「う、生まれたときから始めるんですか？」

「ん？ 言ってなかったっけ？」

「はい………って、うわ！？」

何かの力で、一気に引つ張られる感触がした

「お別れだ、巫 カンナさん」

その言葉と同時に私の意識は消えて言った

「そうか、……まだ終わってなかったんだな」

青年は一人、静寂の川を見ながらかすれたような声で呟いた。

2話 世界の現実・私の現実

神様は、やさしくありませんでした。

今年11歳となる私は、1歳の時に孤児院に捨てられたみたい。赤ちゃんの時の事は、記憶が薄れているためまったく覚えていないだから、私を産んでくれた両親の顔すら分らないのだ。

さて、私はカンナ・シュベルト。この孤児院で暮らしている女の子です。

シュベルトは、この孤児院の院長の奥さんだった人の旧名からとったらしいです、カンナは……知りませんが、でも、なんだか運命を感じちゃうよ。だって……私はカンナだったんだもん。

早、この世界に来て10年と11ヶ月もの月日が経ってしまいました。

あの管理人の言葉通り、私は別世界に来てしまったのだ。

この世界は、魔法と呼ばれる物が存在する

前の世界では、おとぎ話とされてきた、あの魔法だ。

どうやら、この世界は科学技術ではない、魔法と呼ばれる物で発展を遂げてきたため、生活のほとんどが魔法に満ちている。

例えば、水に関して、この前見たのでは、魔法具と呼ばれるもので田んぼの稲に水をやっている所

遠くからであり見えなかったけど、石のような形の魔法具を空高

く投げた瞬間に雨雲が、その田んぼの上空に突如現れて水を出し始めていた。

アレには驚いたけど、院長に聞いたらアレが一般的な田んぼの水やりなんだそうだ。

なんて簡単なやり方なんだ、しかもその石は、とても安いらしい農家さんも大助りな道具なはずだ。

魔法とは、科学とは異なった概念の物だと思う。

次に私についてだ。

私は今孤児院にいる、つまり両親に捨てられたか両親が死んだかだ。先も言った通り、私は両親に捨てられたのだ。それには、キチンとしたわけがあるんだ

神様は意地悪だったりする

この世界は、黒と呼ばれる色の生物は、不吉な存在として認識されるのだ。

何故不吉なのか、私はまだ聞いていないけど一般的な常識として人々に定着している。

もし、そんな世界に、黒髪と黒目を持った人間が生まれたらどうだろうか？

この世界にも、一応は黒目の人間は存在するらしいけど、その人たちも差別対象となっているそうだ。

そして、もし私が、黒目と黒髪を持って産まれてきたとしたらどうだろう。

私は……捨てられちゃったんだ。

「カンナ？ 昨日あなたの部屋を見ましたよ。埃だらけじゃないですか、キッチンと掃除はしてますよね？」
「うっ」

朝のご飯、孤児院院長が私を鋭い目つきで、見てくる。

「そ、それが、アレクも知ってると思うけど、私家事とか苦手なの！ つまり掃除も苦手なのよ」
「それじゃあ、言い訳になりませんね。掃除は2日に一回行つのが、このルールですよ？」

「うっ、でも私じゃあとてもとても」

「じゃあ、一緒にやりましょうか？」

その声は、廊下から聞こえた
後ろを振り向くと、部屋の扉が開き金髪の美女が姿を表す

「……マリア」

「うん？ 手伝ってあげるよ。さっき見てきたけど2時間もあれば終わるでしょ？」

「で、でも。私がやったらさらに2時間プラスになっちゃうかも……」

「いいよ、掃除をやることに意味があるんだから、ホラ始め始め」

マリアは、私の手を引っ張ると、まだ残っている私の朝ご飯が、食べれなくなってしまった

って、なに私のご飯食べてんのよチビ達！？

「ま、マリア離して！！ 私の、私のご飯が……」

「はいはい、終わったら食べてもいいから」

「いや、終わったら多分なくなってると思う」

「いいじゃない、ちびっ子たちにあけても」

私の目の前では、私より年下の孤児の子供たちがテーブルに置いてあった私の食料を食べ尽くそうとしていた。

私のご飯……

マリア「マイクス

この孤児院を、作ってくれた貴族の娘だ。

作ったのは、彼女のお祖父さんらしいけど、なんせ、建ってからもう30年は経っているはずだからね

最近、建物も古くなってきたから院長が、魔法コーティングをしてくれるようにマリアのお父さんに頼んでたし、そうとう古い建物のはずだ。

さて、そんな娘のマリアは、私が3歳だった頃からの親友です。

雨の日も嵐の日も嵐の日も雷の日も、共に過ごしてきたのは彼女でした。

多分だけど、私たちはとても固い絆で結ばれてるでしょう。

彼女といると………良美を思い出してしまう

彼女もマリアと同じような存在だったから……

10年も経っていると言うのに、私は未だ、前の世界の友達や家族、啓ちゃんを忘れることが出来ない

たまに夢を見る、啓ちゃんと良美と三人で一緒に居る夢を、私はま

だ忘れられないのだ。
思ってしまう、いつか帰りたい……と。
例え、かなわない夢だとしてもね。

「なんでこんなに埃だらけなの!!」

「マリアが2時間で終わるって言ったじゃない!!」

「ええ、ええ言いましたよ？ でもまさか8時間、丸々一日使うとは思わなかったですねえ!？」

「逆ギレ!？」

「それに、部屋中はカビ臭いし、蜘蛛の巣が天井に張ってるし、さらにはゴキブリまで………あんだ、どうしてこんなになるまで掃除しとかないのよ」

「……面目ないです」

さすがにゴキブリは、ビックリしました。

今の生活に、文句はない。

ただ、やはり私は今の生活に実感がわからない

ここは、私の居る世界なのだろうか、どうなんだろう？

「お、終わった」

「ええ、なんとかね」

あたりは既に暗くなり始め、窓の外は夕日が沈んでいく
疲れた私は、ベットに抱きつくように横たわると、マリアも同時に

ベットに倒れこんできた

「疲れた、私寝る」

「うん、私も寝る」

でも、このマリアと居る時間だけは、何故か自分の居場所がここだと分かせてくれるのだ。

神様は意地悪だったけど、マリアと出会わせてくれたことには感謝だった。

3話 黒のカナナ

「なんで、ここに黒が居るわけ！ 気持ち悪いわよ」

そいつは、そういうと手を振り上げ私に頬にビンタをした。

まだ、私が5歳の時で黒のことなんか知らなかった時だった。

何故ビンタされたのか、何故気持ち悪いと言われたのか分からなかったけど、彼女の目はまるで汚物でも見るような目で私を見ていた。

——怖い

何も言い返せず、ただただ彼女を見ているしか私は出来なかったのだ。

昨日、掃除を一日かけて行ったお陰もあって、私の部屋は見違えるほど綺麗になっている。

院長のアレクも感心した様に私たちを見つめ、「今度からはマリアさんと二人でやったらどうだい？」と、素晴らしい提案をしてくれた。

「嫌です！ 掃除はキッチンとカナナにやらせますから」

そして、とても恐ろしい、面倒な意見も貰った。

とまあ、さておき。

朝食の時は、とても騒がしいこの孤児院。しかし朝食が終わると静まり返っている

私と同じか、それ以上の歳の子はただいま勉強中

何故勉強するかと言うと、15歳にある国家騎士試験を受けるためだ。

騎士とは、国を守り国に忠誠を誓った者達のことだ。

それに、この孤児院で育った子は大体試験を受けて騎士として生涯を過ごす子が多い

騎士は、高収入で戦争もしないこの国で、一番安全な職業だ。

それに、学歴関係なく国に仕えることのできる職業なんだ。

この世界でも、学歴社会であるため、通常の職業にはどうしても何か資格やら学歴やらが必要

しかし、私たちの様な孤児、学校にも通うことの出来ない子供は、学歴不要な所でしか就職できない。

試験は有るもの、学歴は問わないので、騎士になるのが一番いいことなのだそうだ。

他にも学歴を問わない職業は有るけど、大抵犯罪的な物や命をかける物なのだそうだ。

10歳から、孤児院では勉強が始まったけど、なんだかやる気が起こらないの

他の子は死に物狂いで、勉強してるし、騎士のために剣の使い方を教えて貰っている

でも……… なんだかなあ。

生きるために騎士になって、いっぱい辛い目に遭うだろうにそれでも頑張ってる。

私の性格上、そういうの好きじゃないんだよね、生きるためにどうのこうのって。

やっぱり楽しい、自分のやりたいことをやりたいよね。

私は、別に騎士にはなりたくないからさ。なにか別の物って感じかな。

「とまあ、そんなことで。私は勉強しません」

「……………一辺、死んでみる？」

「と、思ってみたり何かしませんよマリア。私は勉強だいっすきだから」

一瞬別の人の台詞に聞こえたよ、でもどうやったらあんなにも目を見開くことが出来るんだ。

「……………カナナ、あんたの答えは別に間違っちゃいないわ。でもね、勉強は必要よ？ この世界で生きていくためにはどうしても必要なことなのよ」

「ですよね……………」

勉強が必須なんて、何て世界なんだ！

「はいはい、勉強を頑張って」

「はあ、…そういえば、今日アークさんが来てるのよね？」

「そうよ、なんか院長に話があるみたいなの」

「へえ」

アークさんとは、マリアのお父さんの事だ。

今、この孤児院を支援していただいているのもアークさんって事になる。

前に、3回ほどあったことが有るけど、あの顔は絶対に忘れることは出来ないだろう

「そうだ……………今から挨拶に行きましょうか？」

「勉強は？」

「そ、その後するよ」

「まさかとは思うけど、勉強をサボるために行くんじゃないわよね？」

「ハッハッハ、ナニヲイツテルンダイ？」

「別人になっちゃってるって」

目の前で、飽きれながらため息を吐くマリア

「どうやら本気で私が勉強サボリのために行こうとしていると、思っているみたいだ」

「で、今日はどのような用件で？」

院長室で、腰をかける院長のアレク「ガネット。今年、61歳だが活気あるお爺さんだ。」

彼と対峙するように座る男、貴族で、この孤児院を支援していただいているアークシェイド

顔は、まるで歴戦の騎士の様な面構えだったりする男である。

「まずは、突然訪れて申し分けなかったと謝りさせてくれアレクさん」

「それは別にいい」

「そうか？ 子供たちの勉強を教える所だったんだろ」

「ああ、その事か。いいんだいいんだ、勉強は他の教師役の奴が見てくれる」

「ああ、そうか。カンナは、誰か見れくれてるのか？」

「……………」

「そうか、やはりお前意外は嫌っているのか」

ため息を尽き、子供たちの部屋がある部屋を窓から見つめる

「まあな、しかしそれもしようがない……のだ。なにせ黒は悪の象徴としてなっているからな」

「しょうがない、まだ子供でもか？」

「他の孤児院の者は、若い者が入ってきておる、今はまだ彼らではあの子に近づかんよ。お前も覚えているだろ？ 5年前の出来事を」

「ああ、……でも、そう考えるとアレクさんの人選は間違えていないな」

「気弱そつな奴を選んでるからな、もう間違えは侵さんさ」

——コンコン

扉を開く音が部屋に響き、扉を遠慮がちに開く

「し、失礼しまゝす」

「まゝす」

扉の前に、カンナとマリアが入ってきた

「カンナ、勉強はどうした？」

「アークさんが来てるって聞いてたから、挨拶に」

「と、言って、勉強をサボっておったな？」

「ウグ」

的確な指摘

「やっぱりそうなのねー！」

「ち、違っつてば」

「アハハハ、さすがアレクさんだ。カンナの習性を理解しれらあ」

「しゅ、習性つてなによアークさんー！」

まるで、私がいつも勉強をサボってるみたいじゃないか

「まあいい、おいカンナ、マリア。そこに座りなさい」

「はあい」

「んでな、今回ウチの娘のマリアを、王都の魔法学校ウエルスに入れることになった」

「「えっ!？」」

呆然とする私と、驚きのマリア

どうやらマリアも聞いていなかったらしい

「お父さん！ 私別にこの街の学校でも」

「いや、お前は王都に行け」

「……………理由はなんですか？」

「我がマイクス一族は、騎士の一族だ。男は騎士、女は魔導騎士にならなければならない。お前は魔力は平均よりかなり高く、魔法を扱う技術も申し分ない。これは一族すべての総意、ウエルス魔法学校は有名校だ、お前はそこで更なる魔法技術を学べ」

「……………はい」

一族総意と言う言葉で、マリアは一瞬肩を震わせ観念したように返事をした。

「でだ、カンナ」

「あ、はい……………なんでしょうか？」

「君も入って見ないか？」

「はい？」

「入って見ないか？」

「どこに」

「学校」

「どここの」

「王都の」

「なんて」

「ウエルス魔法学校」

「……………」

「娘と一緒にな？」

「え、え……………!？」

生まれて初めての大声でした。

「何してるんですか先生!？」

「アレク院長!！　なんでここに悪魔がいるんですか？」

「悪魔？」

アークが見つめる先には、呆然と新任の先生を見つめていたカンナの姿があつた

苦い気持ちで彼を包んだ

「この悪魔め!!　何故貴様のような黒が生きて」

「セシル先生!！」

「なんです？　今この悪魔に」

「今から君を解雇する、この孤児院から出ていきなさい」
「な!？」

驚きな顔をするセシル

「この孤児院は、色に囚われず、一人一人に平等に接するのを心情

にしているのだ。君は今そのカンナを傷つけた。君はこの孤児院にいるべきではない」

「……………」

なんで彼女はそんなに私を睨みつけているのだろうか？ 何故恐怖なような目で見ているのだろうか？

そんな、先生が最後に私に向かって言った言葉は今でも心に傷を残している

「両親も災難だったな、こんな悪魔を黒を産んじまうなんて」

啓ちゃん……………助けて

4話 自分で決めなくてはいけないこと

院長室に、アークさんがいると聞いていたので、なんとかマリアを説得して挨拶をすることに成功した。

私は断じて勉強をサボりたかったわけではない！！

しかし、事態は急展開して、私はマリアの王都行きをその場で聞かされることになった。

その時は、さすがに驚いて頭が混乱をしまっていた。

だって、私の唯一の安心できる親友がどこかに行ってしまう、考えただけでもゾツとする

しかも王都に行くのだから、もう遭えないかもしれないのだ。

この国はアーデイス王国と呼ばれる国で、人間の大陸カイル。

総人口25億人が住んでいる大陸だ、そしてそんな大陸のど真ん中にあるのがアーデイス王国である。

アーデイス王国は、別名魔法王国と呼ばれ大陸屈指の超魔法大国なのだ。

この国の人口は約3億人、魔法を日々研究している魔法の最先端を行っている国

そして、私たちが今いる場所はアーデイス王国サクエス地方最北端にある街ルネス

王都からは、馬を飛ばしても2日はかかる距離にある街だ。

小規模の街のため治安はいいとは言えないが、自然に恵まれているとても住みやすい町。

私はこの10年、一回も孤児院を出たことがない。

街に行けば、どうしたって私の髪を誰かに見られてしまうからだ。もし、見られたら院長や支援しているアークさんにも迷惑がかかってしまう。

だから、一度もここから出ることはなかった。

それにマリアが毎日の様に来てくれた、出たいという感情はない

今回マリアは、王都に行ってしまう、もし行ってしまったら孤児院にはなかなか来れなくなってしまうだろう。

逆に私の方から会いに行こうにも、この髪を見られてはいけけないので、行けない。

つまり、もう私はマリアと一書にはいられない

そんな、マイナス思考な私にアークさんが畳み掛ける様とんでもない言葉を口走った

「君も入って見ないか？」

え？…………私ですか？

「でも、私は無理ですよ」

「そうか？ カンナだったら出きると俺は思っけどな」

「…………私、学歴持つてません」

「学歴なんて必要ない、学校に行くんだから」

「保護者がいません」

「俺になるって」

「試験も受けてないです」

「貴族推薦つてので、行けるんだ」

「…………私、黒です」

「それは…………」

押し黙ってしまうアークさん

ほらね？ 無理ですよ、私は行けないの

「カンナ」

そんな時、アレク院長が立ち上がり、部屋にあった机、その引き出しを開けた

そして、何かを取ると私の所に来て、そっと手にそれを渡す

「これって……………」

「魔法具だよ、なあアーク？」

「ああ」

意味が分からない

私の手には、十字架の形をしたキーホルダ見たいな物がある
これを私に渡してどうしろと？

「それは、いずれお前さんに渡すはずだった物だ。アークが二年ほど前に王都から買ってきた品でな、髪と目の色を変えることの出来る道具だ」

「変える？」

「ああ、お前さんが外に出歩けるようにするためのもんだよ」

渡された十字架の魔法具を見ながら私はそれを握り締めた

「…これ、高いんでしょ？　こんな高いものは受け取れないです」

「大丈夫だ、その魔法具は、二年前に大流行した物でな、とても安いんだ」

「…………でも」

「怖いんか？」

怖い……確かにそうかもしれない

「お前さんは、外の世界を見たくないかい？」

「見たい……ですけど」

「だったら、それはありがたく貰ったときなさい」

「はい」

「でだ、魔法学校。通って見ないか？」

アークさんからの再度の質問

怖いのは確かだ、だって私の世界は孤児院の中だけだったのだ。
突然外の世界に行け？ 怖い気もする

「行きましようよカンナ！！」

「マリア……」

「私、カンナと一緒に居たいの」

「えっと……百合？って痛い」

「そうじゃなくて、………カンナみたいな親友、ここに残して行けるもんですかって事よ」

「見たいなつて、あんた……」

「で！ 行ってくれるの行かないの？」

そう一方的に攻められましても

もう一度魔法具を見る、マリアを見る、アークさんをアレクを見た。

「………行って見ようかな」

私は、このやさしい人たちと過ごして行きたいと思った。

「まずは、大勢の人からなれるために、明日街に行くわよ！！」

「あ、明日！？」

「ええ、明日。王都には一ヶ月後に行かなくてはいけなから。突然大勢の前に連れてつたらカンナ混乱思想だもの」

ここ十年、出会った人はわずか30人程度
たしかに、大勢の人ってあんまり見ないわ

「分かった、じゃあ10時に行きましょう」

「O・K」

5話 属性

魔法具か……

右手に握られている十字架の魔法具を見つめる

これは、黒を隠すための道具なのよね。

前の世界では、黒髪なんて珍しくも何ともない色だったのになあ
管理人さん、何で黒の髪と目なんかにしたんだろう。

いや、ただ単為運がなかっただけかもしれないけどね

部屋に戻る途中、十字架を握り締めながら複雑な心境でいる

ウエルス魔法学園か……

院長室から出ていくときに、アークさんから突然通う事になった魔法学校の案内を渡された。

その場の雰囲気で、行くと行ってしまったけど、そもそも魔法学校って魔法の勉強をするところなんだよね。

私に魔力がどれくらいあるかも、魔法適性も何かも分からずに言うてしまったけど、どうなんだろうか？

魔力が低かったら、もし入れたとしても微妙な雰囲気の中で、過ごすことになるんだよね。

部屋に入り椅子に腰を下ろす。

寮なんてあるんだ……

私とマリアは、寮に住むことになるんだろうけど……

「これって魔法適性ごとに寮もクラスもバラバラになるんじゃない」
もしかしたら、仮に一緒に行けたとしても遭えなくなってしまうかもしれない
「これはまた、いろんな意味で難関だよ」

この世界にある、現象を引き起こすことが出来る法則
法則を引き出せるのは人間と、魔物・魔族、亜人と呼ばれる者たちだけだ。

人間が考えた、人間だけが仕える法則を魔法と言う。

魔法の法則を扱うには根源である、生まれながらにして生き物が持つている魔力が必要だ。

また、魔法には人によって使える属性の種類が違ってくる。

魔力、適性属性は、決して変えることは出来ない。

その他、属性は最高でも2つしか有することは出来ない。

「じゃあ、私はなんの属性なんだろう？」

久しぶりに棚に入っていた魔法関連の本を取り出し、魔法に関して勉強を始めた。

私が得に知リたかったのが属性についてだ、というか、なんでこの歳になるまで調べようとかしなかったのだろうか？
不思議でしようがないわ

「えっと、属性は、全部で12種類？ 結構あるのね」

自然属性が5種類で、炎・水・雷・土・風
進化属性が4種類で、焰・氷・砂・嵐
特例属性が3種類で、転移・召喚・強化

つまり、私はこの中のどれかってことになるんだよね
私としては、雷か水がいいかな。

雷ってなんか格好いいし、水は癒しとか出来そうだし。

補足すると、進化属性は、自然属性がないと得ることの出来ない属性なんだそうだ。

生まれた時に属性が決まっているのだから、進化属性がある子は自然属性も有しているってことなんだよね？

進化属性の焰がある場合は、自然魔法の炎があるって考えたと思う。

特例属性を有している者は、自然属性を有することは出来ないらしい。

転移は、あらゆる場所に魔方陣と魔力を使って移動が出来る。

召喚は、召喚者の空想世界の生き物を現実へと引き出すものらしい。

召喚は魔力が高いだけ力のある生き物を召喚できるのだそうだ。

強化は、その名の通り自らを強化することが出来る物だ、これも魔力が強いほど強化も強くなる

「はあ、なんだか読むのが面倒になってきちゃったなあ」

魔法なんて使ったこともないのだ。

マリアは、魔法を使えるらしいけど、私は一度も見たことがない属性については、一通り読み終え本を閉じる

「私が見えるのはこれくらいなんだけどな」

（《移動》）

魔法関連の本を手を持ち、心の中で思った。

その瞬間、手にあったはず本が消え去り、見たときには先ほどの本棚にしまつてあつた。

「なかなか、使える能力よね」

管理人と名乗る者から与えられた能力

私が手に持った物や移動したい物を、移動と思うと自動的にその場から移動してくれる大変便利な能力だ。

この能力は、マリアにしか言ったことはない。

でも、一度もマリアの前で見たこともないけどね

あれ？ だったらなんでマリアは私の言葉を信じてくれたんだろうか。

今度聞いてみよう

6話 マリア（前書き）

6話 マリア

「ねえマリア、これって何のお店？」

看板に、木の棒のようなものが飾ってあるお店を指差す

「杖専門店よ」

「杖？ 昔の魔法師達が使っていた？ 時代遅れなんじゃない」

「確かにね、でも一部のマニアとかには未だ人気がある魔法具なのよ」

「へえ」

マニアねえ。

始めて来た街の商店街は、私に取って別世界だった。

孤児院ではない、数々の魔法具。見たこともない生き物。見たことのないお店
どれもこれも、心踊らされる。

朝、緊張で胸が張り裂けそうな気分だった。

院長の指示にしたがって、十字架の魔法具《写鏡の十字架》を、発動させた。

基本設定は、金髪金目で、マリアとお揃いになっている。

黒から、突然金色に変わった物だから、下の子供たちは口々に、こいつ誰？ などと、院長に言っていた。

私も鏡を見たけど、本当に自分が分からないくらい、変わり様だっ

た。

思い起こすと、中学の友達が、高校に通い始めた時金髪に染めてみんなから誰こいつ？　と言われていたなあと、思い出した。

マリアは、孤児院の前で待っていた私を見るなり目を見開き、「サイコー」と、今までの印象が崩れるほどの行動を、取ってくれた。今まで、私に不気味がって近づかなかった他の先生は、私は色が変わったことでつながりが出きるかもと、期待を抱いていたけど、ダメだった。

色が変わっても、私に対する何か……恐怖感？　が、残っているらしい

彼らは、私の色に恐怖心を抱いているのではなく、私に抱いているのだと言うことが分かる、寂しい？　かな

「……てば！　聞いているのカンナー！！」

思いふせっていた私に、マリアは何かを言っていた様だ

「あ、ごめん。何か言った？」

「だから、ここらでお昼にしましょうか？　って言いたいのに、そうね」

お腹もなってきたし、ちょうどいい時間帯よ

「お父さんに頼んで、おいしいお店を教えてくださいましたから」

「おいしいお店！！」

「多分ね、お父さんみ味覚は……期待しないほうがいいわよ」
覚めたような目で遠くを見つめるマリア

この行動からして、本心で言っていることがわかる

アークさん、あなたどうしたら娘にそんな風に思われるんですか！

マリアの言ったことは、本当でした。

アークさんが、紹介したお店に入った所は、店は普通、店員普通、しかし店長が変で、料理も変でした。

まさに2：2の様なお店です。

マリアは、肩を震わせてなんだか変なオーラが、……なんだあれ！
？ マリアのまわりが黒いオーラを放出してるぞ

触らぬ神に祟りなし、よしこれを合言葉にしようか

「当店特性のミズ口うどんでございます」

……ミミズの様な生き物のうどんが出てきてしまいました。

これを食べると！？

いやまで、もしかしたらこの世界のうどんはこういうのかもしれないわ。

孤児院では、いつもパンかご飯に漬物が日常で世界の料理なんてしないから

常識がないとか、言われたくないし……

そして、口にミズ口と言う生き物を食べた

言葉で表現すると、ゴキブリを口に入れるような気持ちになる食べ物だった。

「よく食べれるわね……」

「えっ！」

食べ物に関しては、今後マリアに聞いてから食べよう

心に刻み込んでおこう
そして、いつかアークさんに復讐してやろうじゃないか

そして、のんびりとした時間は過ぎていき、孤児院には5時に帰ることになっている

マリアは、小さい街だと言っていたけど、一日で十分楽しめる大きな街だと思う。

生まれてこの方、孤児院が私の世界だった。

でも、外の世界も悪くないものだと思えてくる

あと一ヶ月、そうすれば、この国最大の都市に行くことになる。

それを思うだけで胸が張り裂けそうになるくらいドキドキする

私は一日、この街を見て、この世界も悪くないと思えてしまったのだ。

「楽しかった？」

「まあね、自分の世界が広がった気がした」

「そっか、でもこの街なんかすっごい小さいんだよ。王都なんか行ったらカナビックリしちゃうかもね？」

「うん、そうだね」

ホントにそうだ

私の傍らで笑うマリアを見ながら、強くそう思える
この世界だって、悪くなかったんだって

6話 マリア（後書き）

戦闘シーン入れたかったんですが、入れられませんでした。

7話 突然で、分からない事だらけです

今日0時を過ぎたら、私の11回目の誕生日になる。

実際の誕生日は、多分違うと思う。

1歳の時に、この孤児院に預けられた

何処かの小説に出てきそうな感じに、夜中に玄関の前に捨てられていた。

院長の話では、捨てられていた時、服も何もない形で、ただ黒い喪服が被さっていただけだったらしい。

この世界で、喪服の黒は邪悪を払う物なんだそうだ……

と、まあ話はそれたけど

つまり、捨てられた私が誰でなんなのか全く分からなかったそうだし、院長の長年の勘で決め、誕生日を捨てられた日にしたと言われた。

ま、そんな事は、置いといて、私の親に事を何打も言っても始まらない

つまり、今日は私の誕生日！ と、言いたかったんです。

「ねえ、カルナ？」

「どうしたの、カルナ？」

男の子がうつむき加減でこちらを見ってくる

分かっておりますよ、プレゼントですよ？

カルナも今年で10歳になって、まわりの空気が読める子に育ったんだね

私は、うれしいよ

「か、んな…………グス」
「うえ!？」

あ、あれ？ 楽しい楽しい誕生日のはずが、急に葬式のような雰囲気になっちゃってるぞ!？

カルナは、私よりも少し背の高い男の子で（私、139センチ。カルナ、144センチ）いたずら好きで、何時も私やマリア、それに院長に迷惑をかけるガキンチョだ。

そんな彼が目の前で突然泣きだし始めてしまった。

男の子の泣き顔は、啓ちゃん意外見たことなかったので、柄にもなく狼狽してしまった。

「どうしたのカルナ？」

「き、聞いた…………んだ」

「聞いた？」

「王都に…………」

王都でだんまりになってしまったカルナに、ようやくなぜ泣き出したのか分かった

多分彼は、院長か誰かから、私が王都に行くと聞いていたんだろう
柄にもなく泣く彼に、私は胸を打たれた

「…………あゝ、そういえば言ってなかったね。そうなんだ、私、王都に…………行く」

「…………んで？」

「え？」

「なんで行つちまうんだよ!？ あれか？ここの生活が嫌か？ それとも勉強？ それとも…………俺？」

「…………」

「俺さ、……きだ」

突然叫び出したカルナに、驚いた私は、呆然と彼を見つめた

「……だったのに、お前が行っちゃったら会えなくなるじゃねえか」
「カルナ？」

「……りたかったのに、俺がお前を……たかったのによお」
「カルナ」

「……したら、お前は俺の……として見てくれるんだよ」
「カルナってばー!!」

突然の事で、私、対処しきれませんよ
一体、何だって言うの？

「……なあ、なんで行くんだ？」

なんで……まあ、マリアに誘われたからかな？

「なんで、俺を……ここが、嫌になったのかよ」

そんなことは、ないよ。

もしかして、カルナは何か勘違いしてるのかな

「そりゃあ、俺たちは孤児でさ、他のやつらから上から目線で見られるさ。嫌になっちまうかも知れねえ。だからさあ、……が、守つてやるか……あ」

「何を勘違いしてるの？ 孤児院が嫌い？ 上から目線で見られる？ あのねえ、私はそんなチンケな事でいちいち気にしない。あんたが一番分かってるでしょうに」

なんせ、男では、カルナと一緒にいるのが一番多いかったんだ
それに、上から目線の前に、恐怖の目が先に私を見つめてくるって

「だ、だったら何で出てくんだよ！」

「私が行ってみたいと思ったからよ。それ以外に理由、ある？」

「……」

「まっ、長年一緒にいるアンタを残していくのは心許ないけど、でもさあ、いずれ分かれるんだから。覚悟は……出来てたんでしょ？」

なるべくやさしい声でいった……つもりだったんだ

カルナは、今にも泣きそうなそして苦しそうな表情で、私から逃げ出した

突然で、驚いたけど……どうしたんだろうかカルナは？

なぜか分からないけど、なんだか普通でない誕生日になるかもしれないと、思ってしまう。

7話 突然で、分からない事だらけです（後書き）

長くなるので、半分に話を切りました
そして、いろいろと、突然です。

8話 マリアは見た

——どうしたものかなあ……………

私は、カンナの誕生日パーティーの準備のため、夕方頃に孤児院に訪れた

サプライズパーティーのため、カンナには何も話さず、密かに準備を進めている

「マリア、悪いけど玄関に置いてあるパーティー用に買っておいた食器を取ってきてくれ」

サプライズ計画なのに、なんで堂々と玄関にそんなものを置いておくのだろうか…………？

「分かりました、…………今度からは、置くところを考えていただきました」

「アハハハ、いや、俺も今気がついたんだ」

「……………わかりました、もういいです」

「おう！ 頼んだぜ」

「はい、サプライズ何ですけど、もう見つかってもいいやって気分なのは私だけですかね？」

「まあまあ、これもカンナのためと思ってね」

「はい」

だったら、何度も言うけど、置く場所もカンナをおどろかさるため
と
思
っ
て。

別の場所に置いてもらいたいよね

カンナの初めての街めぐりから一週間が過ぎて行つた

カンナは、ことあるごとに大きな声を上げては、私に「あれなに？」
と、誰でも知っているはずのお店を指差して興奮気味に聞いてきた。
そして、私はこの街めぐりを何気なくカンナに誘った事を後悔した
お店を見ることに目をキラキラさせたように聞いてくるカンナ
それは、とてもかわいらしく私とお揃いの色の髪を揺らしながらか
わいらしいと、同時に美しいと思わせるようなその仕草

キラキラした目を見ながら思ってしまった

——悲しい子だな

10歳、今日で11歳を迎える彼女は、本当なら街なんて見飽きて
いるはずではないだろうか？

本当なら街を徘徊して、街の子供や孤児院の子供と遊べるのではな
いだろうか？

実際、孤児院の子供たちは、時偶街に行き、街めぐりと称した大か
くれんぼや、鬼ごっこなどをしている。

たつた、たつた髪の色、目の色で世界が変わるなんて……

だから、キラキラしたカンナの目を見たときに、悲しみと同時に歓
喜が私の中を渦巻いた

自己満足かも知れないけど、私が友達の、親友のカンナをこの目に
させてあげたんだって
うれしくれしかたがなかった

私って、バカな子なのかもね

玄関に行く途中、微妙な空気な空間に居合わせてしまった
正体は、泣きそうな目をこらえながら、カンナに訴えているカルナ
と、それを困惑そうに答えているカンナだった。

カルナは、今10歳で、カンナと同年の男の子
5歳の時にこの孤児院に来て、カンナが弟の様に可愛がっていた子
最近、なぜか距離を置いている感じであった
カンナは、反抗期？ などと、言っていたけど、……カンナだから
仕方がないのかもね
あんなに、はつきり分かるような行動取ってたのになあ

しかし、今私の前で起こっているのは、私にも一応は責任があった。
カルナイや、カンナが彼から離れる原因を作ったのは、私なのだから

——覚悟は……出来てたんでしょ？

いつもと違い、厳しい言葉をぶつけるカンナ
多分、彼女なりのけじめではないだろうか
カルナは、カンナの弟のような存在だから、家族としてハッキリと
言っただと思う

でも、彼女は気づいてない

「これは、時間が必要なのかもね？」

カルナは、強い子だから大丈夫

でも、カンナも、もうちょっと気遣いというか、なんというか……

カンナの鈍さは考え物ねえ

8話 マリアは見た（後書き）

9話 男の子

——分かっていたんでしょ？

言いすぎちゃったかな？ 私なりには普通に言った言葉だったんだけど

カルナって、性格は勝気だけど、弱い部分もあるんだって泣かせちゃったよ……

カルナのあの泣きそうな顔が、先ほどからずっとループするように私の頭のかなに流れていく

「カルナは、男の子で……私の弟だから」
たとえ、分かれたってずっと弟だから

カルナには、私の思いは、伝わっていないのだろうか？

分かれたって家族なんだってこと

「まあ、時間が必要だと思っわよ」

「……………いつから？」

「別に、たまたま通りかかったのよ」

「趣味が悪い……………」

「そんなこと言っただってねえ」

後ろから声が聞こえた

振り向くと、すこし真剣そうな表情のマリアがいた

どうやら、さっきのカルネとの会話を聞いていたらしい

「でもね、カンナ。あいつの気持ちも分かってあげなよ？ あいつはカンナにとつて弟だけど、男の子でもあるんだから」

「？ まあ、弟ではあるよ、でもそれとこれとは、と言っかなんで泣いたのかいまいわからないんだけど」

「………… ヒント1、男の子って気になっている女の子をずっと守りたいとか、思っちゃう物なのよ？ カルナにも近くに守りたい女の子でも居たんじゃないかしら？」

「守りたい？」

確かに、男の子ってそういうの夢を見たりするけど

カルナに守りたい子がいるのかなあ？ でも、それと私のことはどこがつながってるわけ？

「ここまで言っても、まだわからないか。ホントどうしようもないわね」

「そんなこと言ったって、わからない物は分かんないよ」

ホントに、意味わかんない

そして、夜になった

マリアに連れられて、この孤児院でもっとも広い部屋に入った

「………… お誕生日オメデトオー……………」

あまりのちびっ子たちの大きな声に心臓が飛びはねてしまいそうになったよ

中には、テーブルが4台置かれていて、今まで見たこともなかった

豪華な料理がズラリと並んでいる

居るのは、孤児院のちびっこ達に、アークさん、アレク、それに数人だけと昔馴染みの先生、それからカルナ

「あ、えつと……………え？」

「もしかして、誕生日パーティーやらないと思ってた？」

「うん、まあね」

それに、これほどの豪華な料理

あまりお金がないこの院で、どうやって……………

「心配せんでいい、これらの食事はアークさんからの差し入れた」

「そうそう、それに子供がそんな心配そうな顔すんな」

「いや、でも。私だけこんな……………」

「ん？ カンナは知らなかったか。そういえば最後にこんな料理を見たのは14年ぶりだったな」

「え？」

「ここから、出て行く子は、出て行く前に応援の気持ちを込めて豪華な料理を振る舞う風習でな。お前さんより年上がいままでいなんだからやってなかったんだ」

「そ、そうなんだ」

「だったら、まあ……………いいか」

「た、食べたあ」

「いや、食べすぎたって」

誕生日パーティーが終わり、マリアと一緒に自分の部屋へと行ったちよつと、はしゃぎすぎた？　せいで、調子にのって七面鳥っぽい

ものを、まるごと食べてしまい、気持ち悪い。食べ過ぎた

「……………気持ち悪い」

「吐かないでよ？ 気持ち悪いから」

「ひどい、ひどすぎる！！ ウツブ！？」

「喋らない喋らない」

「わかった……」

「じゃあ、行くね、おやすみ」

「うん、今日はありがと」

「ここは、どこ？」

あたり一面、芝生で、どこまでも緑な地面

空は、ずっと見たことがあった、地面の緑の芝生とは違い白一色
白の空だった

『君の深層心理だね、端的に言っちゃえばだけど』
懐かしい声が聞こえる

前と同じように後ろをゆっくりと振り返ると、思っていた通りの人
物がいた

「久しぶりだね、管理人さん」

『おや？ 今度は驚かないんだね』

つまらなそうに答える

肌が真っ白で、銀の髪と目の男が立っていた

年齢は、20はいつていないような顔立ちだから、18・9歳ほど
だと思う

「まあ、最近はなんか驚くことばかりだったので、耐性がついたと言っか」

生まれて初めて見た世界は、驚くことばかりで、たかが管理人程度に驚くこと私ではなくなつた

『いやいや、たかが管理人って、普通の人間は、俺と喋ることもできなainだけど……』

そうなんだ、まあ私の恩人でもあるからたかがは良くなかつたか

『そうだ、お前の弟だけどな、自殺は免れたよ』

「……そう、ですか」

よかつた、啓ちゃんは生きてるのか

「で？　今回はどのような用件ですか？」

10話 力

『君さあ、今度魔法学校なんて所に行くんだろ』

なんでそんな事を知ってるの？

もしかして、管理人さんって暇人？

『なんだか、失礼なこと考えてない？ 魔法学校に入ることを知っているのは、君の深層心理から記憶を読ませてもらったからだからだからね』

「そうだったんですか」

暇人ではないのか

『それは置いといてだな、カンナ、お前このまま魔法学校に行ったら大変なことになるぞ』

「大変なこと？ なんで」

『……お前には魔力がないんだ』

「……What?」

いやいや、魔力って生物なら誰もが持てるんでしょ？

魔力がないとか……なにいつてんのよ

『実を言うとな？ 魔力って魂と同じような物なんだよ。簡単に言うて証明書のような物』

「証明書？」

『そう、この世界の魂であることの証明書』

「この世界の魂であることの証明書？ あまり理解出来ないんですけど」

『……つまりだな、魔力ってのは、この世界で作られた魂だけがもっている、この世界で作られましたよって分かるための証明書なんだ、お前は別の世界から魂ごと持ってきたけど、別の世界で作られたためにその証明書がないんだよ』

よし、あまり説明はうまくないけど何となく分かった

「つまり、私にはその証明書がないために、魔力も存在していないと」

証明書「魔力つてことかな？」

「そうだ」

「で、どうすればいいと？」『漸く本来の目的を話せるな』

『お前には、魔力とはまたことなる、神力と呼ばれる力がある』

「・・・何それ？『神力とは、即ち神の力 神とその神に仕えるものだけが使える力だ』」

「私、神でも神に仕えてるものでもないんですけど？」

そんな物に、なつた覚えはないんだけどなあ・・・

『あゝ、なんだ、その・・・ お前は俺と契約したことになるんだよ』

「契約？ あれですか？ この世界に来たことですか？」

『ああ、そうだよ。 魂が世界を渡るには俺のような存在と契約しなくてはいけないからな』

なんと、私の知らないところでそんな契約が行われていたなんてあの、魔方陣っぽいものが、契約するためのものだったのかな？

「ん？ というか、あなた神なの？ 神力なんてものが私にあるってことは、私は神に仕える物なんですよ？ っていうことは、契約した貴方は神つてことに、なるわよね？」

『そうだな、管理人はお前たちにとって神だな 俺はただ世界を見ているだけだから実感ないけど』

知り合いは神様でした、なんか小説のタイトルになるんじゃない？

『でだ、お前にこの事を教えた、でもまだ使い方が分からないよな？』

「当たり前です」

突然なにやら機械を渡されて、これは便利な物なんだと言われても、何が便利なのか分からないのと一緒にだ

『神力、それを使うにはイメージでやるのが一番手っ取り早い。簡単に頭で掌から火を出すイメージをしてみる』

「掌から火のイメージ……」

私の頭の考えは悲しいほど単純なので、言われた通りに手を前に出して、小さな火の塊を想像した

「すごい……」

自分でやって、初めてやって成功した

私の掌からの数センチ前に、オレンジの火の塊が、浮かんでいた

『一億六千万か、有り得ない数値だよな、やつぱり……』

「ど、どうですか管理人さん」

『ん？ ああ、いいんじゃないか。なかなかのイメージ力をもってるな、一度で成功か』

先ほどの真剣な表情から一変して、笑顔を向けてきた

『まあ、一応は感覚を掴んだな？』

「はい」

『じゃあ、もう大丈夫だな、人間の魔力検査は、乳児期の間に一度だけしか行われないし魔力がないと、ばれることもないだろうし』

「その為に来てくれたんですか？」

『まあな、あ！そうだ、神力は力の塊であって、それを形にするのは、神術や神法だからな。覚えておけよ』

「はい」

なんだか、授業を受けている気分だな

『最後に、お前の力は、人間の魔法や魔族・魔獣の魔術、亜人の精霊術に比べ余りにも強力だ、使い方には気を付けてくれ』

余りにも真剣なその表情に、私も真剣に答える

「わかってます、使い方は考えますよ」『ならいい』

その言葉と同時に、私達がいた場所が薄れ始めた

「何!？」

『時期に目が覚める、お別れだ』

「はい、なんか毎度毎度お世話になってますね」

『それが、お前を此所に連れてきた俺の義務だからな』

義務……

その時、私はカルナに言った言葉が頭に再生するような形で蘇った
「謝ろう、あんな言い方は、やっぱり良くなかったもんね」

私のいた地面も消えていき、全てが消えた

閑話 取り残された者たち（良美）

私の世界が壊れた

私が小さいときには、すでに両親の離婚話があった。

幼稚園に通っていた時、バスで家まで帰っていた私は、他の子はお母さんがバス停に居てくれるのに、私だけ何時も誰もいないバス停を降りていた。

家に帰ると、電話で誰かと話しているお母さんがいた

不思議と、その時間帯に帰るとお母さんは電話をしているのだ

——大好きよ。。

今思えば、お母さんはお父さんとは違う、別の男性と電話していたんだ

彼女と出逢うまで、私は一人だった

人との付き合いがわからない
喧嘩になつてしまふかもしれない
嫌いって、言われるかもしれない

私は臆病で、誰とも話すことが出来なかった。

私の世界が変わったのは、小学3年の時
一人の可愛い女の子との出会いが始まりだった

日直だった

「めんどくさいな、朝早くからがつこうなんて」

日直の仕事は、朝、花の水やりと黒板をなんと雑巾で拭くこと
なんとも面倒な仕事だった

「なんでもう一人来てないのよ、面倒ね」

日直は、二人で行うのだけど、まだもう一人来ていない

そんなときだった、あきらかに慌てているような声と共に、教室の
扉が勢いよく開かれた

「ごめ〜ん、朝寝坊して遅れた」

そこには、同じ日直当番の巫さんがいた

「別に、いいわよ」

「そお？ あ！ ゴミ箱にゴミがたまってるね。私捨ててくるよ」

「え？ 今日はごみ捨ての日じゃあ……いっちゃった」

巫 かなさん

このクラスのマスコットの存在、何時も笑顔を絶やさない元気な娘
クラスの邪魔者扱いな私にも構ってくれる、この頃から彼女は輝い
ていた

——ガラッ

「なんだ、まだ誰もきてないじゃん」

「私ら一番乗り？ あれ、かななちゃんは？」

「さつき、階段降りてくの見た」

黒板を拭いている私を居ないかのように振る舞う女の子集団
最近になってから、集団化してきているのでちょっと怖い

「あれ？ るみ子ちゃん達、今日は早いね」

「まあね、かななちゃんが日直だって聞いて早くきたの」

先ほどのふざけた態度を続けているやつら

そのリーダー格がるみ子と言う、ツインテールの奴だったりして、
私を無視を始めた張本人だ

かななは、仲はいいけど、すこし一線を引いているような印象を受ける

「日直なんてそいつにやらせて、私ら遊ぼうよ」

——嫌な奴

「ごめんね、私日直とかはキチンとやりたいの」

そして、この頃から既にかんなは、自分の意志が強い子だった

「わかった、早めに来てね」

巫さんの言うことは、何故か聞くるみ子さん

そして、そのお供のような感じの女子集団

私はどうしてもこのクラスを好きにはなれなかった

「ねえ、いけば？ 私が全部やつちゃうから」

黙々と日直の仕事をしている巫さんを見て、つい強い口調で言ってしまった

「私はね、誰かに何かを押し付けるようなことはしたくないの。掃除はまあよしみちゃんにやつてもらってるけど、せめて自分に出きることはしたい」

「そ、そう」

巫さんって変わった子だ

「よしみちゃんも、もっとみんなと話してみれば？ あんな態度だけど話してみると意外とおもしろい子達だよ」

「………巫さんは、好かれてるからだけど、私なんて、無愛想だし話してもつままないし…無理だよ」

「じゃあ………まず私と仲良くなるっよ」

「はあ!?!」

突然に何言い出すんだこの子は、うあ、目がキラキラ輝いてる

「私がよしみちゃんの友達第一号ね、ということ、まずは名前から、私のことはかんって呼んで?」

「い、いやよ。恥ずかしい」

「いいじゃん、私たち友達だし」

「………（何時から友達に）でも」
「ほら早く」

「……………かな」

「よし！！　これで私たちは親友だ」

「格上げされてるよかな！？」

——　そういえば、あつたなあそんなこと

久しぶりの思い出に浸っていた

かなは、2日前に死んだ、通り魔に殺されたのだ

私の目の前で

今でもまぶたの裏に蘇る

夕焼けの空で、かなを校門で見け走って追いかける私

柄にもなく叫ぼうとしたときに、急にすぐ何メートルか前のかながうつ伏せで倒れた

一瞬なにが起こっているか分からなかった私、茫然としている私に、どこからか通りすがった住人の叫び声とともに我に返った

見たときには、目が閉じられ、ナイフが丁度心臓付近に刺さっている、地面が真っ赤に染まり手をだらんとさせて住人の人におこされている姿だった

おこしている人は、首を降って、警察と救急車を呼ぶように言っている

私はただ、目の前の光景に茫然としているしかなかった

—— かなは、お前が大声を上げれば助かった

どこからか、そんな声が聞こえた
でも、私も同感だった

『良美さん!!』

どこからか、叫び声が聞こえる、なんで、ここに人が居るの？
鍵は閉めた……閉めていなかったな

「だ……れ？」

「僕です、啓一です」

ああ、啓くんか

「なんで、なんでこんな……」

悲痛な声が聞こえる

ごめんね、啓くん、君のお姉さんを死なせちゃって
私だけ、逃げようとしちゃって、でも私は、もうここには居られないから

—— ゴメンね

「でも!!でも、姉ちゃんはアンタに生きてほしかった筈なんです」

私は卑怯な人間なのよ
たとえなんて、言われても

「ぼ、俺、昨日自殺しようとしたんです」

——えっ！？

「でもさあ、出来なかつたんですよ。姉ちゃんの悲しそうな顔が頭に過るんですよ、泣きそうな顔が浮かぶんですよ。ダメだった、無理だった、俺は死ねなかつた」

「姉ちゃんのためにも生きなきゃって思っちゃった、もう俺は一生自殺さんてしない。だってさあ、姉ちゃんが悲しむ」

——私がよしみちゃんの友達第一号ね、ということで、まずは名前から、私のことはかんなって呼んで？

バカだなあ私

「か…んな」

「大丈夫です、もうすぐ救急車が来ますから」

「ごめんね……」

「きますから……だから」

「次会えたら、言うよ」

「だから！ 死なないで」

最後に見たのは、啓くんの涙でした

閑話 取り残された者たち（啓一）

一本の短いベルの音が、僕のすべてを壊した

——と、いうことで、残念ではありますが病院に運ばれた時点で心臓は止まっていたそうです。で、ご確認で保護者の方に来ていただきたいのですが、。。病院です。

あまりにも、あっさりと言う電話後しのだれかハッキリ言えば、何がなんだか分からなくて、受話器を手に呆然と立っている
しかなかった。

「姉ちゃんの遺体を確認？」

なに言っちゃてるんだ、こいつは
だってそうだろ？ たしかに今日は帰るのが遅いけど、まだ9時だ
もしかしたら……誰かと遊んでるかもしれないじゃんか

気がつくとも床に手を付き

「なんで、なんで、早く帰ってこいよ姉ちゃん」

虚しく、大声をあげている自分がいた

あれから、何時間経っただろうか？

結局一時間ほど、その場に立ち尽くしてしまった僕に待っていたのは警察のお迎えだった

保護者は、同居中の僕しかいないから確認して欲しいそうだ

そして、ベットで寝ている姉ちゃんをようやく見ることが出来た
姉ちゃんは、まるで死んでいるかのように固まっっていて、触つてみ
ると体が固まりつつあった

「んだよ、意味わかんねえよ、意味わかんねえ！」

なんと、なんども姉ちゃんの腕や顔を触っても何の反応をしめさな
かった

体温が感じられなかった、ただそこには姉ちゃんという抜け殻がい
るような感覚だ

——君のお姉さんは、連日から通報があつた不審者にさされたら
しい、近所で偶然見ていた方の服装などの証言で、不審者の服装と
一致したそうだ。そのほか体格や顔立ちなども一致した。捕まるま
では相当時間はかからないだろうと思う。……我々も警戒はしてい
たんだが、すまなかった。

——そっか、姉ちゃんは死んでしまったんですね

——そうか

一体いつまでその場で、ないただろうか？あまり覚えていなかった
気がついたら姉ちゃんは運ばれていて、僕は家のソフィーで座って
いた

電話がなっていた、出ると親戚のおばさんおじさんが急いでこちら
に向かっているそうだ

新幹線で朝一番に出発し、１１時頃にはつくだろうと言われた
葬式やらいろいろなのは、おじさんおばさんが引き受け手くれる
らしい

両親不在のなか、着々と姉ちゃんの葬式が始まるうとしている

式場を取るために、おじさんは動いてくれておばさんは、親戚一同に何時行つかの日程を電話で言っていた

僕はただ、呆然とソフィーに立っているしかなかった

まだ、受け入れられていないのだ。姉ちゃんの居ない世界を

「姉ちゃん、僕もそっちに逝っていいかな？」

選択肢は残されていなかった

姉ちゃんがないのなら、ここに来られないのなら、僕が逝ってあげよう

そうすれば、姉ちゃんだって一人にならずにすむ

梯子を立て、天井に縄を吊るす

階段を上り、あとは落ちるだけ

それだけだったのに

—— 啓ちゃん、だめだよ？

頭に響いたその言葉で、俺はそこから落ちることが出来なかった
縄を首にかけて落ちるだけだったのに、怖じけずいてしまった

「なんでだよ、なんで怖がつてんだ俺。姉ちゃんは向こうで寂しがつているはずなんだから、俺が、俺がいなくちゃ」

—— 命はね、一つだけなの。たとえ死にたいと思っても一つしかないその命を壊してしまったら勿体ないわ。もし、もしね？ 自分に必要だった人が消えてしまったら、消えてしまったらその時は……

「寂しかったのは、俺だ。 姉ちゃんの所為にしてはいけないよ、

泣いてる姉ちゃんは見たくないんだ」

なくなってしまった物は取り戻すことは出来ない
そして、なくなってしまうた者をもう一度取り戻そうとしてはいけない

そんな時だった、リビングのドアが開きそこには、何ヶ月ぶりの
両親の姿があった

彼らも、驚いているようだった

「啓……」

「いつちゃん……」

「父さん、母さん」

翌日の事だった

姉ちゃんが通っていた学校で、姉ちゃんの追悼式が行われた
姉ちゃんの事件は、警察の不適度な捜査が原因としてマスコミにひ
どく叩かれる事件へと大事になっていった。
そんななかでの追悼式だ

保護者参席で、大勢の人たちが体育館に入っていた
校長の言葉から始まり生徒、母の言葉で最後に花を添える
姉ちゃんの写真が花の中央に添えられていた

その中で、俺はあることに気がつく
花を添えるなか、一人の生徒が震える様な顔で、写真を見上げている

「良美さん……………」

姉ちゃんが一番の親友だった人だ

俺もよく遊んだり、勉強を見てもらっていたりする、ちょっと不器用で、とてもやさしい人

その人が、青い顔をしながら決められた椅子にすわる
どこかで、そう、どこかで見たことのある表情だった

追悼式が終わり、中には泣いて体育館を後にする生徒もいる

俺も両親と共に帰宅した

まだ、家での葬式があるから両親は出かけていく
中学生の俺に出ることはなかった

また、昨日と同じようにソフィーでボーとするしかなかった

——死ぬしかない

「思い出した!」

良美さんは、昨日の俺と同じ表情をしていたんだ

そして、来るのは恐怖感だった

もし、もし良美さんが自分の責任だと思っていたとしたら……………

良美さんの家は、近所にあってよく姉さんが通る度にここは良美の家だと言っていた

なので、場所は知っている

学校は、午前中で終わっている筈なので、どこかに出かけてるんじゃないかなければいるはずだ

彼女の両親は、今別居中で良美さんは家に一人で住んでいる

なので、余計に心配なんだ
何かやらかしてしまうのではないかと

インターホンを息が切れそうなほどつかれている体で何とか押す
でも、誰も出る気配はない

「拉致があかない」

後で誤ればそれでいい
玄関の取手に手を置いて引っ張る
留守なら鍵はしまっているはずだった

「……………開いてる」

良美さんのことだから、掛け忘れはないだろう
つまり、中に人がいると言うことだ

思い切って中に入り、リビングやその他のところをくまなく探した
けど、誰もいない
思いっきり不法侵入だけどもにしてみればいらなかった

「どこいったんだよ、良美さん」

そんな時、シャワーと言う音が聞こえた
よく耳を済まして、聞こえる方に行ってみると見落としている部屋
があったのに気がつく
中は、お風呂のようだ

「なんだ、よかった。シャワーの音で聞こえなかったのか」

心配して損した

安心した俺は地面にへたり込んだ

とまあ、一応は不法侵入なので、彼女が出たら誤ろう

だけど、いつまで経っても出る気配も、シャワーが止む気配もなかった

訝しげに思った俺は、声をかけてみた

「あ、あのすいません。お、僕です啓一です。突然お邪魔してるんですけど、良美さん？」

とりあえず喋ってみた、応答はなかった
さすがにおかしいと思った

扉を強く叩いたけど返事はなかった

「おいおい、まじかよ」

開いてるか分からないお風呂の扉を開けようとする
鍵は開いていた、開いていたけど……

「良美さん、大丈夫ですか!!」

見たのは腕をお風呂のお湯の中に入れて真っ赤に染まった血のお湯だった

良美さんはぐったりと寄りかかっている

まさに最悪の地獄絵図に俺は見えた

結局、良美さんはその場で息を引き取ってしまった
死因は大量出血が原因

遺書も良美さんの部屋に残されていた

俺は、結局なにも出来なかったんだ

閑話 取り残された者たち（啓一）（後書き）

すいません、投稿した後付けしました

11話 魔法陣

管理人さんの話から神力は、危険で危ない力と言っるのは分かったでも、使い方をしっかりと決めて置けばいざって時に使える力だと思う

この力を発動させるには、イメージだけでいいらしい
魔法とは、大きく異なる力だった
なぜなら魔法は一定の法則にしたがって行使できる物だからだ

魔法に必要なのは言葉、そして陣
言葉によって魔力を練り陣によって力を解き放つことが出来る
陣は下級魔法使いは紙に書いたり、地面に書いたりする
中級魔法使いになると、陣は頭の中でイメージして発動可能になるらしい

つまり、魔法は言葉と陣が必ず必要になるってこと
さらに言ってしまうと、発動するまでの時間が長いってことなんだ
でも、私はそんな物は必要ないんだとか、なんせ頭の中でイメージするだけなんだからね
私の力は多分戦闘に向いている
よくマリアも言っていたんだ、スピードが勝敗を決すって

今後、私はこの力についてもちゃんと知っておかなければならな
いと思う

「理の力を示す　ブレスレイド」

言葉を紡いでいくと同時に地面に魔方陣が勝手に構築されていく最後の単語を言うと同時に魔方陣が完成し、光ったんだ

そして、あら不思議

先ほどまでの地面がまるで、冬の雪が降った後のように氷となって固まっていた

「と、まあ。　これが魔法よ」

地面を凍らせた張本人が、静かにこっちを向き言う

でも、すごいと思うよマリア、私は魔法は初めて見るけど、まさか一瞬で地面を凍らせるなんてね

「すごいね、これ」

スケートが出来そうだよ

恐る恐る手で触ってみると、凍らせて出来た氷は10ミリくらいなのにもものすつごく固い

足で蹴ってみても割れることはなかった

「水・個体魔法だよ」

「水、氷じゃないの？」

「氷はこんなじゃないのよ、確かにこれは氷の魔法に見えなくもないわ。でもねこの魔法は水属性魔法の中級魔法なんだよ、私が水を生み出すことができるように、氷はなにもない所から氷を生み出すことが出来るのよ」

あゝ、何となく分かります

さっきのマリアの魔法は、多分水を思いっきり冷やして氷にしたんだね

よくもまあ、あんな短時間でできるねえ

あれ？　でも、どちらにしても水で氷を作れるんだから系統的には

氷なんじゃあ……

まあ、深く考えるのはよそう。まだ魔法のことなんて何も知らないんだし

「初心者でも出来る魔法はあるよ、初級魔法って言うんだけど割と簡単に発動できてしまう魔法なの。カンナやってみる？」

「できるな？」

「出来るって、カンナだって水の力を持っているんだから」

「うん」

話すと長くなるからあまり話さないけど、つまりそういうことになっている

「まずね、陣を書くんだけど……」

「うん」

マリアには神力のことは言っていない

その内言つつもりではあるけど、まだ十分にこの能力を使えないのに言ってもしょうがない

それに、変に期待されてマリアに怪我でもさせてしまったら目も当てられないし

十分に使えるようになってから、言おうと思う

と、朝起きたときに考えて、そこでどうやったらうまく使えるようになるか考えた

もし、もしもだよ？ 魔獣やら山賊やらに遭遇してしまって戦闘にな

ってしまった時

はたして私は、キチンと神術を使えるのか？

多分頭が白くなって、イメージすらすることが出来ないだろう

そこで考えたのが、魔法の習得だった
いや、そうじゃなくて魔法をイメージ材料にすることだった

反射的に何かを正確にイメージすることは実戦経験がない私には難しいと思う

でも、ちゃんとした手順がある魔法なら反射的に行動することが出来る……はず

まあ、それでさっそく行動を起こしたわけだけど……

「えっとマリア？ 陣とか覚えなくちゃいけないの？」

「あつたり前じゃない！！」

あれ？ なんかさらに難しいことになってないか？

「大丈夫よ、初級魔法に必要な陣なんて円を書いて中に星を書けばいいだけなんだから」

「そうですか」

でも、円ってコンパスとか必要ですよ？

お願い教えて！！ どうやったらコンパスなしでそこまで正確な円を書けるの！！

「まったく！！なんでまともに円を書けないのよ！！」

「そんな事言っただけ」

どうなってるんだこの世界は……

正確な円なんて普通手書きじゃあ書けないはずなのに

「なんで魔法なのに図形の勉強なんて」

「はいはい、頑張っ
てね」

12話 答え

明確に私が異端分子であることを知ったのは今から三年前のことだった

それまで、ただ単に私の黒は珍しい為に気味悪がっているなんて思っていた

精神は16を超えているとは言っても、体はまだ子供でまわりをキチンと見ることが出来なかった頃のことだから仕方がないことなんだろう

調度その頃だったと思う、カルナと始めて話をしたのは……

私が生まれ現在進行形で育っているこの国、いやこの世界にはレスト教とよばれる宗教が存在していた

その宗教自体は、90年ほど前から始まったらしく歴史はそう長い物ではない

しかし、ほとんどの民が信仰している宗教なんだ、所謂世界宗教

しかし、その宗教には私にとってとてもよくない教えが第一にあるレスト教、通称レストリア宗教が本ただけど、その宗教の根本的なものは黒は悪、醜いだったりしている

そのレスト教の所為で私は両親から捨てられてしまったわけで、でも何故か孤児院の院長やアークさん、それからマリアとカルナに子供たちは私の事を怖がらない

子供たちはまだ小さいから分かるけど、なぜマリアやカルナ達は私を怖がらないのだろう

か？

とまあ、そのレスト教を知ったのは今から三年前なんだ
さすがに世界宗教と言うこともあって、子供は最低7歳になると、
孤児だろ？が何だろ？がレスト教信者が教えをしに来る

そして内の孤児院に来たのが今から三年前

私が八歳になって間もなくの頃だった

その日も、何事もないかの様に過ぎていく日々が続き今日は何を
しようかななどと、のんびりくつろいでいた

マリアは、お昼頃に来る予定でそれまで院長のアレクさんと遊んで
いようかと思っていた

しかし、私が院長室に行くと突然院長は、私に午前中はこの部屋か
ら出ないようになどと言ってくるんだ

意味が分からなかったけど、真剣な目で行ってくるので仕方なく承
諾する

空気が読めてきている証拠だよね！！

と、いいつつも一時間もすれば暇になる

院長は用事があるとかで、私を置いてどこかへ行ってしまった
お昼まで二時間はまだある

少しくらい大丈夫だよな？

そんな軽い気持ちで部屋から出る

窓から子供たちが遊んでいないかと見ると、普段いるはずの子達は
そこには居らず先生の姿すら見えなかった

院長にみつからないようにそつと歩き回ると、どこからか声が聞こ
えてきた

どうやら子供たちもそこにいる様だ
となると、院長もそこにいるだろう

声の先は大広間、私の出した答えは

影に隠れて何をしてるか聞くか

だった。

知らぬ我仏だとはこの事だろうか？

なにも知らなければこんな幸せな事はなかったのに……

着ていたのはレスト教の教えを広める人だったんだ

幼い、そう幼い私はその話を聞いていてまさに暗いドブの中に入れられた、あたりが真っ暗になるほどの強烈な思いがこみ上げてくるのが分かった

そして、ある結論が出る単純で悲しいかった

私は世界で悪なんだ

世界の違いと言う者は怖いもので、思想すら違ってきてしまう

帰りたい、帰りたいよ啓ちゃん

その頃の私にとって、前世は心の拠り所でもあったのかもしれない

「あんな言葉に惑わされるなよ」

影でうずくまっていた私にある言葉を掛けてくれた子がいた

「だれも信じねえって、この孤児院の子供はさあ」
「えっ？」

男の子だった、カルナだった。

その頃は、あまり話したこともなくましてや目を合わせたこともなかった男の子だった

その時の私は、始めて話すその子にただ呆然としているしかなかった
言われた言葉を理解出来なかったんだと思う

「だって、あの男気持ち悪いよ。ニヤニヤしながら黒は悪黒は悪
って何十回？いや何百回も繰り返して言うてるんだよ、アレはない
って」

「そ、そうなんだ」

「それに、内の孤児院のガキンチョ供は変わり者が多いからなあ、
誰も信じないって」

「ガキンチョって……」

アンタもでしょうが

言いたかったけど言えなかった

よく見ると彼の方が私より身長が高そうだったから

背が低い奴が背が高い奴にアンタもガキンチョでしょうが何て、似
合わないすぎるから

「まあ、そういうことだカンナ」

「な！！、私の方が年上なんだからカンナ姉さんとかで呼んでよ」

先ほどの落ち込みっぷりはどこ言ったのか

私でも驚くほどの復活の早さ

「いや、だって。俺より小さいし……」

「年齢に、小さいとか小さくないだとか関係ない！！」

「……だったら、もし俺より身長が大きくなったら姉さんって呼
んであげるよ」

「ええ、その言葉忘れないでよ!!」

などと、つまらない約束をして未だ身長を追い越せない女の子の方が先に身長大きくなるはずなのに

私のカルナとの出会いはそんな事だった

でも、あの時 レスト教の教えを聞いて落ち込んでいた私に気がつき言葉を掛けてくれたカルナ
うれしいというば、嘘になる

あの時、声を掛けてもらえなかったらカルナとの接点もあまりなかっただろう

だから、言わなくちゃね

私の気持ちをさあ

夜、マリアの特訓が終わり

なんとか、曲がっていても陣を描ける様になった私はヘトヘトな体で部屋を目指していた

「き、きつい」

まさに鬼のようなマリア

お年寄りみたいに腰に手を当ててのんびりと部屋を目指す

「大変だな、カンナ」

その言葉いや声を聞いて鼓動が早くなる

時がきたんだ、言う時が

大広間に差し掛かる時に、中からカルナの声が聞こえた

「姉さん、でしょ？」

中は明るく、いつもいる子供たちは食堂でご飯を食べている時間なので、いるのはカルナただ一人だった

「久しぶりだな、その言葉もさ」

「うん、だね」

「でも、まだ呼べないよ」

寂しそうに言うカルナ

初めに言っただのは私なのに、自分でも確かになんて心の中で思ってしまった

「でも、いつかは越して見せるよ」

「多分、その時にはもう俺はじいさんだろうな」

どんだけ未来の話だ！！突っ込みたかったけど止めとく今は、そんなことを言っている時ではない

「あ、あのさ」

「俺さあ、お前を追いかけることにした」

「は？」

えっと……？

「アークのオヤジに言ったら、来年俺も入学させてくれるってさ」

「え、は？」

「と、いつでも、剣士科だからそうそう会えないだろうけど」

剣士科？入学？

「いや、フリーズしないでくれよ」

「……なんで、入学を？」

「言つたろ、追いかけるためだつて」

おい、追いかける？

つまりあれつて事？お前なんて一生俺の身長抜かせないつていいたいがために行くつてこと？

「絶対勘違いしてるな……」

「意味わかんないからああああ！！」

「だろねえ、俺もカンの頭は理解不能だ」

いやいや、突然なんて電撃告白されてもこっちは混乱するから！！

「え、でも急に！………そっか」

私もそうじゃん

私も急にだった、カルナに何も言わなかったのは私だつまり、私はカルナに仕返しをされているわけだ

「ああ、そうだな。お前も俺に何も言わなかった」

「……だね、驚く資格ないし怒る資格もない」

でも、納得が行かないのも事実

ここは一つ、私から喝を入れねば、なんたつて三年の付き合いなんだ

いくら仕返しとは言つても、少しくらい言つてくれてもいいじゃないか

「カルナ」「うん」

向き合って目と目を合わせる

二人しかないこの空間は、すこし大きすぎていてすぐ近くにいる
カルナが小さく見えた

「……」「……」

沈黙

なにも言えずにいる

真剣なその目に、自分の愚かさが見える様で、言葉が出ない

「俺は」

でも、先に口を開いたのは彼だった

目は私が部屋に入ったときから一度も逸らさないで私をとらえている

「俺は、お前を守りたかった」

13話 過去と魔王

あれから、カルナの話聞いてから数日が過ぎた

私は、マリアに魔法に関してのこととアークさんから教材を受け取って事前学習をしたりしている

魔法に関しては、術の詠唱の他に専門的な事も多く教えて貰った

専門的なもので、私がマリアに聞いたのは、なぜ魔法属性の中で自然属性と特例属性は分かれているのか？

いや、その前になぜ特例属性は特例なのかと言うことだ

マリア曰く、特例属性いやそれを使う系統は自然属性と違い魔力を使わないのだという

初めに言われたときはよく分からなかったけど、なんでも昔は召喚・転移・強化は自己の能力としてきたらしい

魔力は使わずに、生まれて来た時についてきた才能とでも言うべき力だが、今ではこの特例属性つまり能力者の数が年々少なくなってきたており、今では特例として魔法属性と認められているらしい

特例属性の者にも魔力は存在しているけど、何故か自然属性だけは使えない

理由は分かっていないらしい

そのほかに、太古の昔には光・闇の二種類の魔法も存在していたらしいけど文献もなくあったことだけが語り継がれていると言っていた

マリアには、他に重要な事を教えて貰った

なぜ？なぜレスト教が作られたのかと言うことだ

何時の時代、何時の世界でも作られることには意味がある
多分レスト教にも黒を毛嫌いするには訳があるのだろう

私の予想は大きく当たっていたけど、まさかの答えでもあった

今から100年も前の事になる

今は既に滅びさっているが、このアーデイス王国の隣にはデリスト帝国言う最強国家が存在していた

軍事国家でもあったデリスト帝国、その25帝王にして100年前の大災害を引き起こした愚王、名前はアロミス

彼はその当時最大の宗教を誇っていたアチリアルを信仰していた人物だ

現在はレスト教に弾圧されているらしいけど、まあそれはいい

アチリアル思想は神を基準とした階級だ

神は絶対的な存在だが、手に届く存在でもある

神を手に入れば、永遠の富と栄光を手に入れられる、おとぎ話のような思想だ

しかし、普通神など手に入れる所か居るかさえわからない

アロミスが出した考えは、神は人間の中に居ると言うことだ

神は人間が考えたのだから、神は人間の中に巣食っているのだ！！

ある本の一節に書いてあった

そこで必要だったのが、今は特例属性となっているが当時は能力者と呼ばれていた存在

なかでも召喚を使える者だ

能力者は、当時でもさほど多くいた訳ではなかったが召喚者は三つのなかではもっとも多くいる能力だった

愚王アロミスは、大陸中から無理やりまたは契約の元に帝国に召喚者を集めたした

全体で大体三万人は集まったらしいが、その半分以上が無理やり連

れてこられた者たちだ

無理やり連れてきた者たちは、丸で奴隷のような扱いだったそうで、腕首に鎖をつけられろくにご飯を与えられなかった

当時でも能力者は、全体的に少ない人数だったために、他の国々にとっても能力者というものは重宝する存在だった

そのために、デリストの周辺諸国の国々はデリストに対して協同能力者解放声明をだした

それが今から101年前だ

それからデリスト帝国は半年に渡り多くの召喚者を帝国に連れてくる

時がたち、デリストに対向するため周辺諸国は連合同盟を結び国連軍を組織、デリストに対して戦線布告した

しかし、時は遅い

アロミス皇帝はすでに神召喚の準備を整えていたのだ
国連軍が、アーデイス王国に集結した頃だった

アロミスは、その召喚をコロシウムと呼ばれていた競技場で行われた

今、偉大なる神を召喚し人間の神になるために我々は行動する

諸君は私が偉大な人間の神になる為の礎になるだろう

光栄に思え！　そして私にひざまずくがいい

有名な、アロミスの言葉だ

召喚達はコロシアムの中心に力を注ぎ神をイメージする

人間が考えた神を召喚しようとした

いや、召喚者達は誰もが思っていただろう

偉大なる神を召喚するなど、出来るはずがない

【我をよびしはだれだ？ 人間の分際で我を引きずりあげたのは誰だ？】

低い、低い声だったらしい

魔方陣の中心、能力者がそいだ力の中心から声がした

召喚者達、力ある者はその声に含まれている力に気がつき恐怖に駆り立てられ力ないものはそれに気づかず愚かな行動にでる

「おお、ソナタが神と呼ばれている者だな？ いや、言わずともわかるソナタのその醜いほどの神力を見れば一目瞭然だ」

しかし、彼が発した言葉は醜くも神を愚弄するかのような言葉ばかりそのような振る舞いを聞いていた召喚物は、薄く笑う

【ほう？ 我を醜い呼ばわりとはいささか人間もバカになったものか……まあよい、我が問いに答えよおろかなる者よ。なぜ我を呼んだのか】

「そうだそうだ、貴様を呼んだのは他でもない、私に永遠の富と栄光を授けよ！」

手を前にだし、コロシアムの観客席からそいつを見おろす皇帝

【富、永遠？ つまらぬな、そんなくだらぬ事で我をこの世界に引きずりあげたのか？ 世界の階層を壊してまで……何と愚かな人間か、まあよい、ここはアデスの世界だったか？ すこし楽しませてもらうことにしようか】

意味不明な言葉をいった神らしき男は、目の前のよくにかられている哀れな者に呪いを与えた

【ソナタには、魔石を与えよう。貴様の体は時期に魔石となり多くの魔獣を呼び覚まし生まれ増やすことになる、そしてソナタは魔石から生まれ変わり魔王、人間の魔獣になるのだ】

そういうと、男は一瞬にして魔方陣、コロシアムの中心から消えた残ったのは、体が異変を起こした皇帝と神を召喚した召喚者だけ一瞬の静寂の後に、皇帝は聞くだけで耳を塞ぎたくなるような叫び声をあげた

コロシアムにいるすべての人間はそちらを向くと、皇帝の体が溶けていき、溶け残った液体が集まり黒い石が出来る

そして、皇帝が完全にいなくなると、その石から奇妙な音が聞こえてきた

そこにいたすべての人間が見守る中、石の回りに見たこともない魔方陣が敷かれた

その瞬間に、そばにいた召喚者達は恐怖にかられ一斉に逃げ出したという

残った石は次第に変貌していき、人型に姿を変える

『そうかそうか、私は生まれ変わったのだな。いいぞいいぞ魔力が膨れ上がっていく、さあまずは何をしようか。何をしても私を阻む者は存在しないのだからなあ愉快愉快』

その声は、またそこにいたすべての人間に恐怖を与えるだけの力が込められていた

ある者は、逃げある者は泣き、ある者は気を失った

ただ、誰も生まれ変わったアロミスに襲いかかる者はいない

『聞け人間共よ！ 我が名はアロミスいや、魔王アロミス』

高らかな声がコロシウムに響き渡る

魔王は、手を振りかざすといつの間にか彼の目の前に黒い狼が数十匹出現した

それは一番初めに、魔王が召喚した魔獣と呼ばれる生き物、闇の生き物だった

数時間後、デリスト中心部に進行してきた国連軍は都市が黒い狼で溢れているのを目の当たりにした

これが100年前に起きた大戦争、人間と魔獣の初めての戦いだった
この中で、国連軍は約8割の戦力を失い形になったが魔獣は退けることに成功する

この戦いの最中、軍の人間は中心にいた全身黒の人間を見たらしい黒髪に黒目、全身からは瘴気のような者が流れていたようだ

それを聞いた軍人は、次の人へと話をつなげていきいつの間にか、この惨状を引き起こしたのは、黒の人間と言うことになっていた
この話は、大陸中に広まり黒排除運動の切っ掛けともなった
これがレスト教の期限であり、切っ掛けでもある

魔王は、国連軍との戦闘のなか姿を突然と消す、国連軍との死闘は、約3日続いた

一節では、旅人によって時の彼方へ葬りさられたと言う

魔王は消えたが魔石は生き残り、今でも魔獣を作り続けている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3147w/>

転生する魂たち

2011年11月12日00時32分発行